

## メッセージアウトライン ローマ 2 : 17~29「誉は神から来る」

[17-20]この箇所はユダヤ人が誇りとしている立場、特権について書かれている。

「自分をユダヤ人ととなえ」…これはユダヤ民族という意味ではなく、神の選びの民という意味であり、そこには宗教的な誇りがある。「律法を持つことに安んじ、神を誇り」…自分たちは律法を持ち、まことの神を知っていると誇る。そして彼らは「みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ」ていた。この律法は「知識と真理の具体的な形」であり、これを読めば神のみこころがわかる。それゆえ彼らは「盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自認して」いた。

[21-23]「どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌きらいながら、自分は神殿のものをかすめるのですか。律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか」

ユダヤ人たちは他の人々に立派なことを教え、示し、指導しているが、それを破り、神を侮っているのではないかとパウロは鋭く指摘する。

[24]「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている」

パウロは旧約のエゼキエル書36:20から自由な形で引用して彼らの偽善を示している。

[25]「もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです」

律法を守り行わない者にとって、その人がたとえ割礼を受けていても何にもならない。割礼というしるしは神のみこころの現れである律法を守ることによって初めて価値を持つのである。

[26-27]「もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょうか。また、からだに割礼を受けていないで律法を守る者が、律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか」

これは割礼を受けていない異邦人が現実に律法の内容を行っているならば、彼らは神の民とみなされるということであり、割礼というしるしのみを鼻にかけるユダヤ人と、その実質を行っている異邦人との立場の逆転である。

[28-29]「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです」パウロは「人目に隠れたユダヤ人」つまり神の民としての実質を備えている者こそ真実のユダヤ人であると言う。「御霊によって心の割礼」を受けた者、すなわちイエス・キリストを救い主と信じ受け入れ新しくされた者こそ真実の神の民なのである。その誉れは人からではなく、御霊によって人を救い新たにされる神から来るものである。